剣道において引き技の重要性

新谷　真優　　多賀　はるか　洲崎　優
鳥居　美咲　　犬塚　優樹　　土橋　紀穂

1　はじめに

（１）　研究の背景

剣道は、境界線を含み一辺を９～１１メートルの正方形または長方形の試合場内で、常に１対１で戦い、原則３本勝負で行う。これは団体の場合も同じである。試合時間内に２本先取した者が勝ちとなる。一方が１本取得したままで試合時間が終了した場合も取得した者が勝ちとする。試合時間内に勝敗が決しない場合は、勝者数法か勝ち抜き法のどちらかで行い、勝敗を決する。勝者数法は勝者の数によって勝敗を決し、勝者数が同数の場合は取得本数の多いチームを勝ちとする。勝者数、取得本数も同数の場合は代表者による代表者戦によって勝敗を決する。また、個人戦の場合は、両者とも取得していない場合、またはどちらも１本ずつ取得している場合には、どちらかが１本取得するまで時間無制限で試合を行う。

勝負を決する有効打突とは、充実した気勢、適正な姿勢、竹刀の打突部位（竹刀の３分の１の先の刃の部位であり弦の反対側）で打突部位を刃筋正しく打突し、残心（打ち込んだ後に相手の反撃に備える心の構え）のあるものとする。審判員はこれに該当しているかどうかを見極めて旗を挙げ勝敗を決める。

試合の際に注意したいこととしては、反則行為というものがある。例えば相手を無理矢理に場外へ押し出したり、試合中に場外に出てしまうことや、自己の竹刀を落とす、鍔競合いの際、鍔と鍔が接する正しい鍔競合いをしているか、などの行為である。これらの反則行為を２回すると、相手に一本を与えることになる。

昨年度の「最も有効になりやすいわざとは」というテーマの卒業研究の結果からは、しかけ技のひとつであるとびこみ技の打突数が多いことがわかった。しかけ技とは相手の隙を見つけて間をおかずに先に技をしかけていく技である。

毎年３月に愛知県春日井市において、全国高等学校剣道選抜大会が行われている。昨年度、その大会を観戦したときに、とびこみ技の数が多いと感じたのはもちろんであるが、上位に進出したチームの引き技の鋭さに驚いた。愛知県内の大会では感じられたことがなかったからである。

そこで私たちは、勝つためには、しかけ技の中の「引き技」が重要なポイントになるのではないかと考えた。

（２）　研究の目的・動機

過去４年、先輩方が剣道についての卒業論文を発表した。平成２３年度では「剣道における打突数と勝率の関係」というテーマで「打突の多いほうが勝率は高くなる」、平成２４年度では「剣道における有効打突を取得するための最大の機会とは」というテーマで「相手の居着いたところの打突機会が多い」、平成２５年度では「剣道において最も有効打突になりやすい技とは」というテーマで「最も決めやすいのは面である」、平成２６年度では「最も有効になりやすい技とは」というテーマで「有効打突数はとびこみ技が多いが、決定率が高いのは応じ技である」という結論であった。私たちは、その中から、昨年度の先輩方の結果の表について着目した。その表では、打突数はしかけ技の一つである引き技がとびこみ技に次いで２番目に多いという結果が見られた。私たちは、その２番目に多い引き技が、勝負の鍵を握っているのではないかと考えた。

引き技は、鍔競合いから打突、片方または両者一緒に打突した後にすれ違う際に打突するなどがある。鍔競合いは、竹刀の鍔と鍔が競り合うことである。現在、全国高等学校体育連盟の剣道専門部の申し合わせ事項では、鍔競合いが膠着状態になり約１０秒経過したら公明正大にお互いの竹刀の先が触れないところまで間合をきる。これは、１０秒の中でお互いが技を出せない状況のとき、その鍔競合いを解消しなければならないということである。その時に、竹刀をはらう行為や打突をしてはいけないと言われている。

そこで私たちは、試合において鍔競合いから技をだす、すなわち引き技を打突することによって試合を優位に進めることができるのではないかと仮定し、研究を進めることにした。

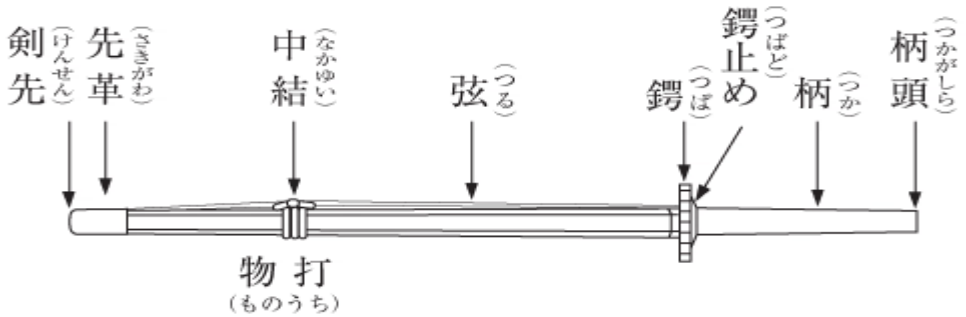

図１　竹刀の構図

２　研究方法

（１）　目的

これは、剣道競技における引き技の重要性について研究を行い、引き技の打突数、技をどのタイミングで打突すれば勝利に結びつくかを分析し、剣道競技における勝敗の要因を研究する。

（２）　手順

ア　以下の大会の試合を分析する。

（ア）　平成２７年度愛知県高等学校総合体育大会西三河支部予選個人戦　（以下、２７年西三河個人）

（イ）　平成２７年度愛知県高等学校総合体育大会　個人戦（以下、２７年県個人）

（ウ）　第１６回世界剣道選手権大会　男女個人ベスト４以上（以下、１６世界選手権）

（エ）　第５１回全日本剣道選手権大会　男子決勝（以下、５１全日本選手権）

（オ）　第５２回全日本剣道選手権大会　男子決勝（以下、５２全日本選手権）

（カ）　第５３回全日本剣道選手権大会　男子決勝（以下、５３全日本選手権）

（キ）　第５４回全日本剣道選手権大会　男子決勝（以下、５４全日本選手権）

（ク）　第５５回全日本剣道選手権大会　男子決勝（以下、５５全日本選手権）

（ケ）　第５６回全日本剣道選手権大会　男子決勝（以下、５６全日本選手権）

（コ）　第５７回全日本剣道選手権大会　男子決勝（以下、５７全日本選手権）

（サ）　第５９回全日本剣道選手権大会　男子決勝（以下、５９全日本選手権）

（シ）　第６０回全日本剣道選手権大会　男子決勝（以下、６０全日本選手権）

（ス）　第６１回全日本剣道選手権大会　男子決勝（以下、６１全日本選手権）

（セ）　第６２回全日本剣道選手権大会　男女ベスト４以上（以下、６２全日本選手権）

イ　各大会の打突数を、前に出て打つ技と後ろに引いて打つ技で分けて、割合を出す。そしてそれをグラフにまとめ、比較・考察する。

3　結果

（１）　２７西三河個人

図２～図１０は、２７年西三河個人の中から９試合を抜粋し、引きながら打突した数と、前に出て打突した数の割合である。

引きながら打突した数の割合が、敗者よりも勝者の方が上回った試合は９試合中７試合であった。その勝率は約８割であった。

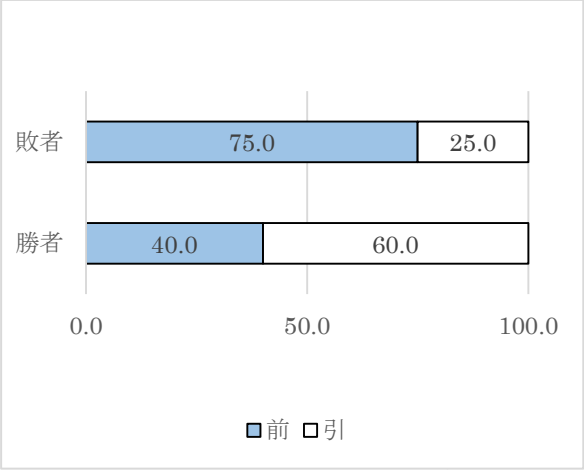

図２　２７年西三河個人①

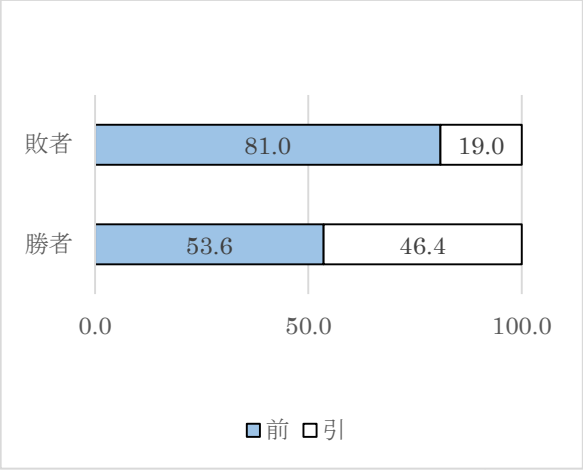

図３　２７年西三河個人②

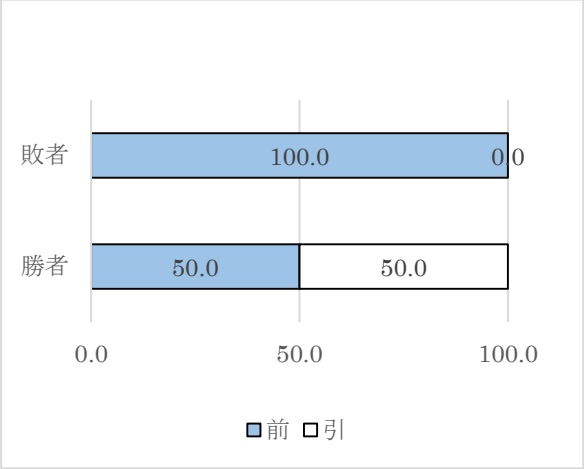

図４　２７年西三河個人③

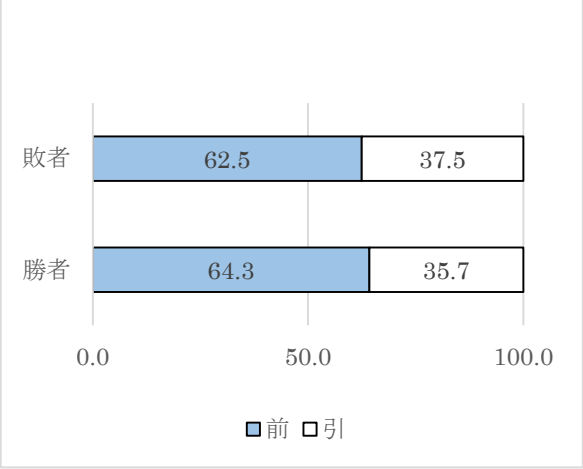

図５　２７年西三河個人④

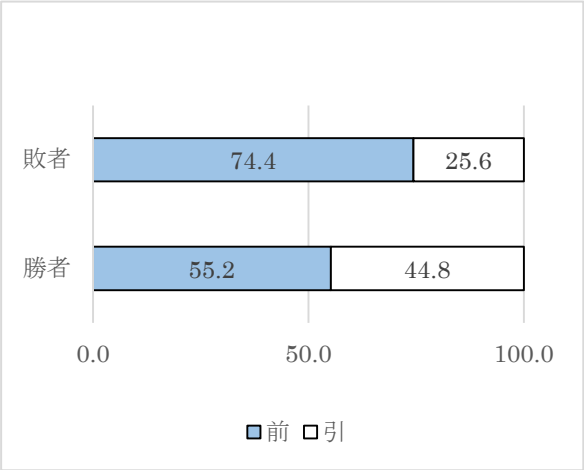

図６　２７年西三河個人⑤

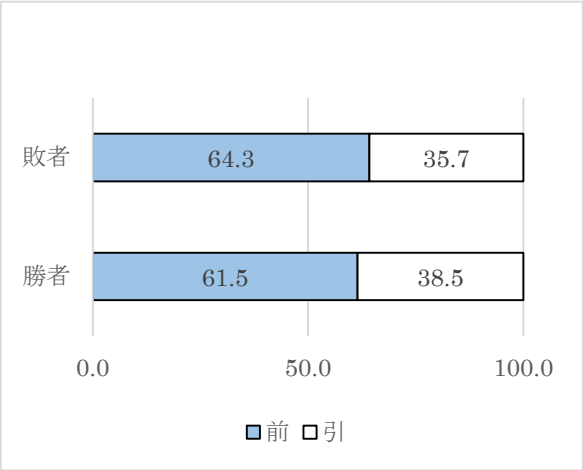

図７　２７年西三河個人⑥

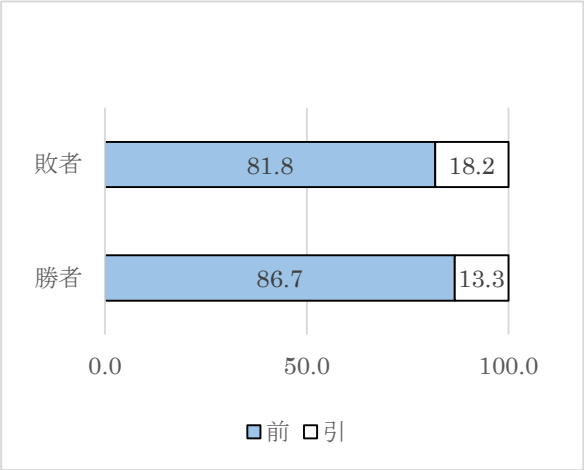

図８　２７年西三河個人⑦

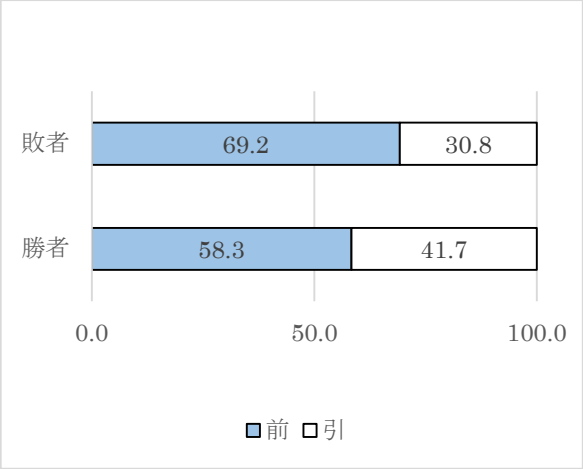

図９　２７年西三河個人⑧

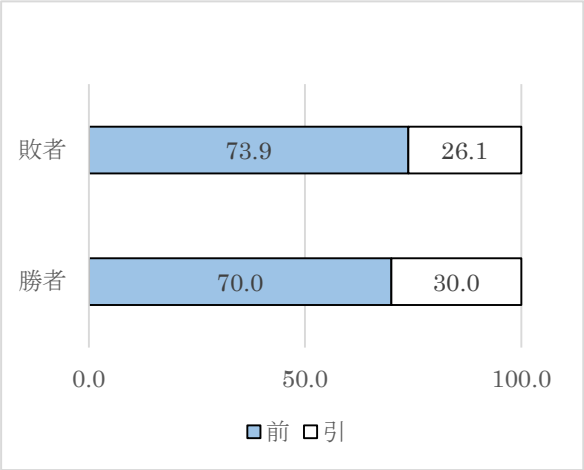

図１０　２７年西三河個人⑨

（２）　２７年県個人

図１１～図２２は、県個人の中から１２試合を抜粋し引きながら打突した数と、前に出て打突した数の割合である。

引きながら打突した数の割合が、敗者よりも勝者の方が上回った試合は１２試合中７試合であった。その勝率は約６割であった。

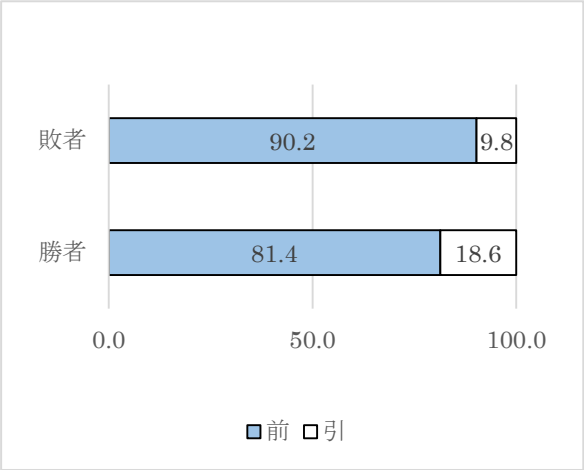

図１１　２７年県個人①

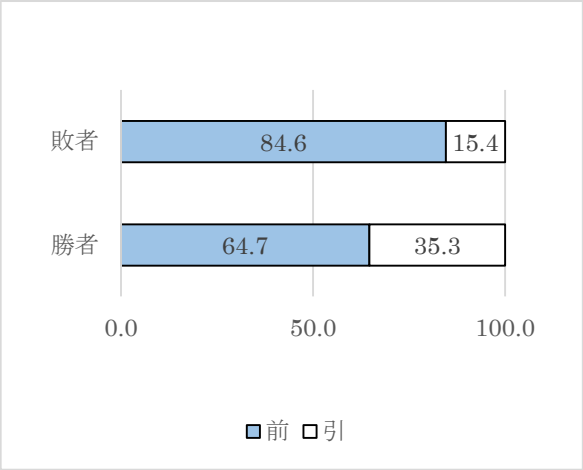

図１２　２７年県個人②

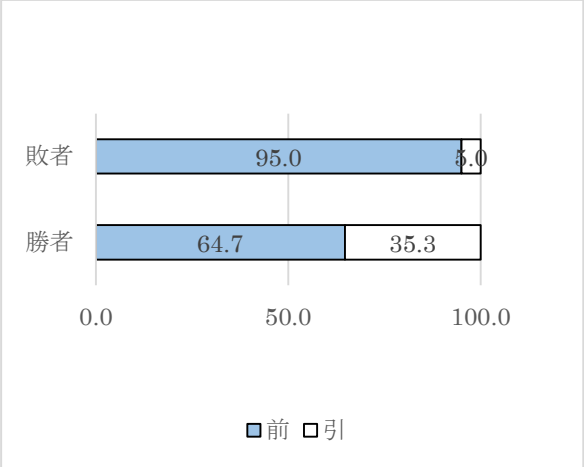

図１３　２７年県個人③

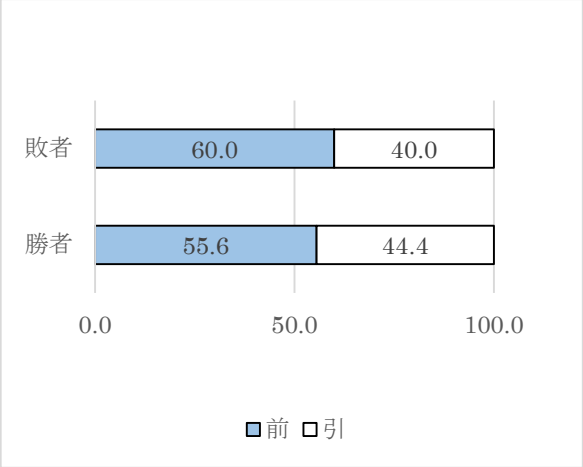

図１４　２７年県個人④

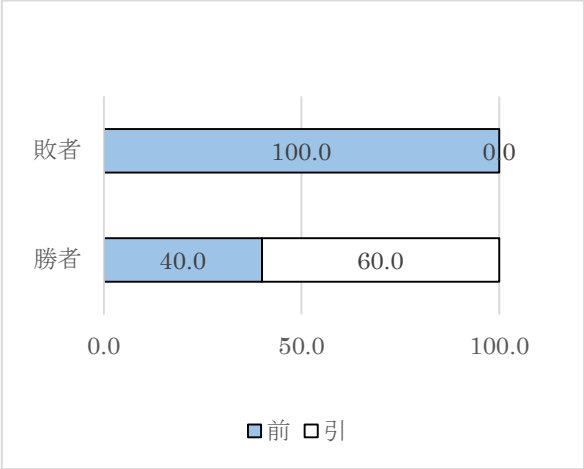

図１５　２７年県個人⑤

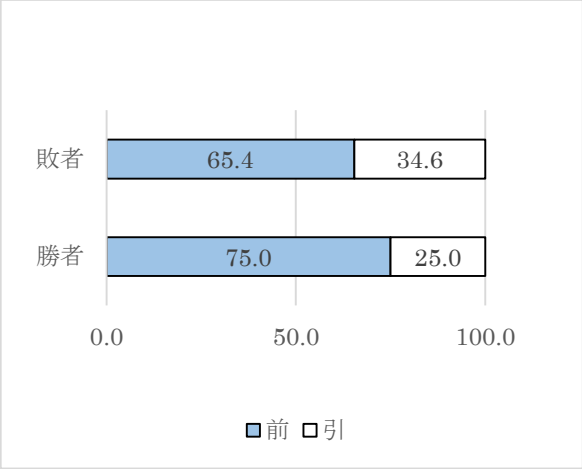

図１６　２７年県個人⑥

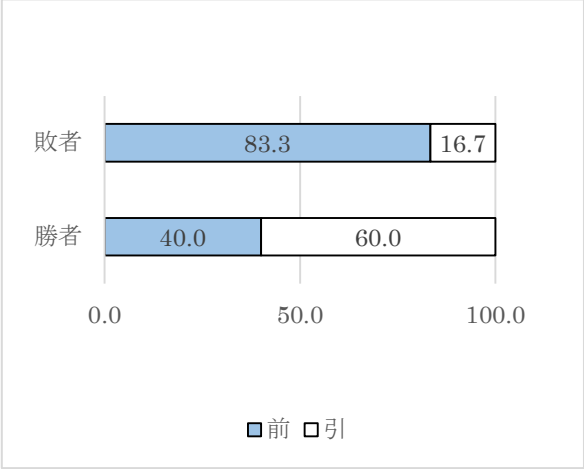

図１７　２７年県個人⑦

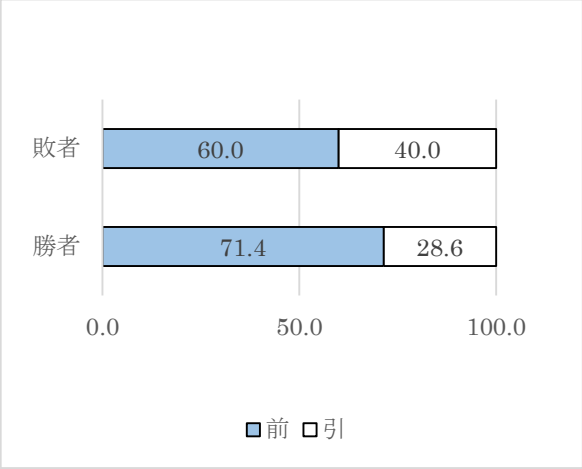

図１８　２７年県個人⑧

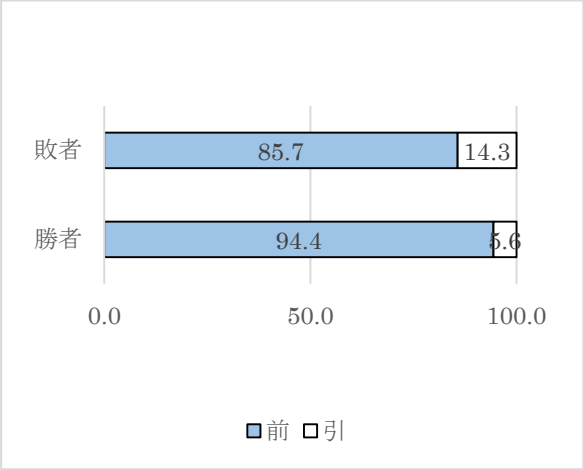

図１９　２７年県個人⑨

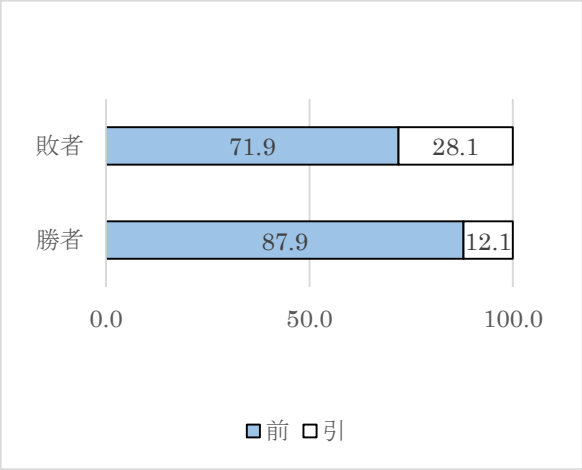

図２０　２７年県個人⑩

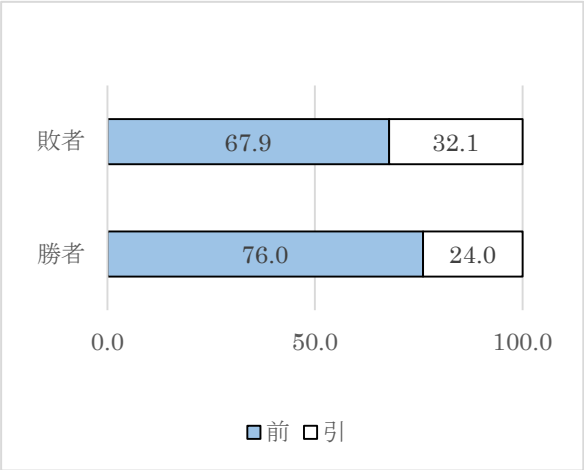

図２１　２７年県個人⑪

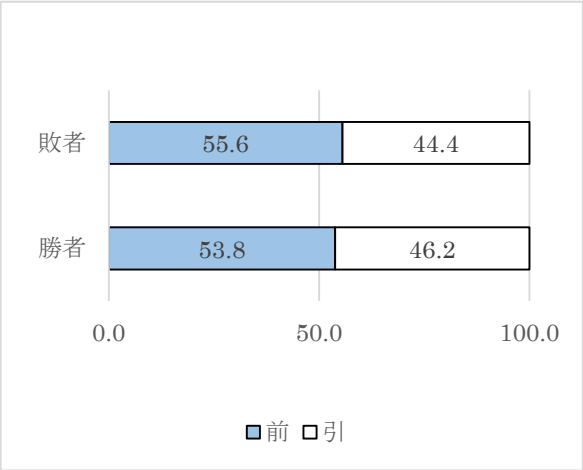

図２２　２７年県個人⑫

（３）　２７年西三河個人、県個人考察

愛知県高校総体で２７年西三河個人と２７年県個人と比べると、２７年県個人の方が少し勝率は下がっていたが、どちらも引き技の打突数の割合が高い方が勝率も高くなっていた。

この結果から、引き技を多く打突する選手の方が、試合を優位に進めることができるのではないかという考えに至った。そこで私たちは、さらにレベルの高い試合では、どのような結果が見られるのか調べることにした。

（４）　全日本選手権、世界選手権

図２３～図３７は全日本、世界選手権の個人戦を一試合ずつ見た結果である。

引きながら打突した数の割合が、敗者よりも勝者の方が上回った試合は１５試合中３試合であった。その勝率は約２割であった。高校生と同じような結果は見られなかった。

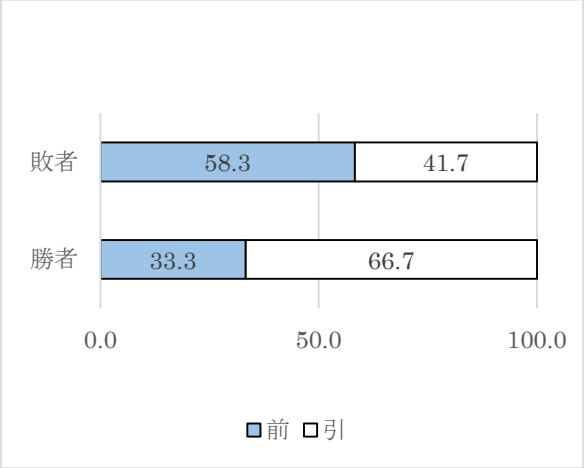

図２３　５１全日本選手権

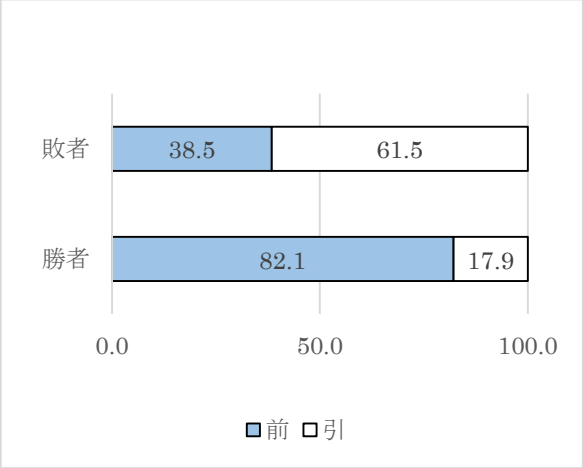

図２４　５２全日本選手権

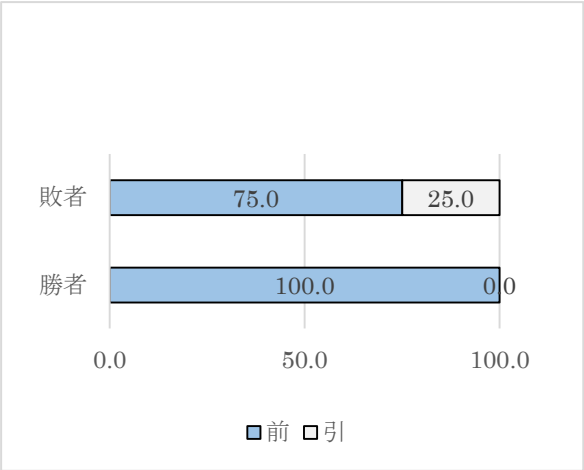

図２５　５３全日本選手権

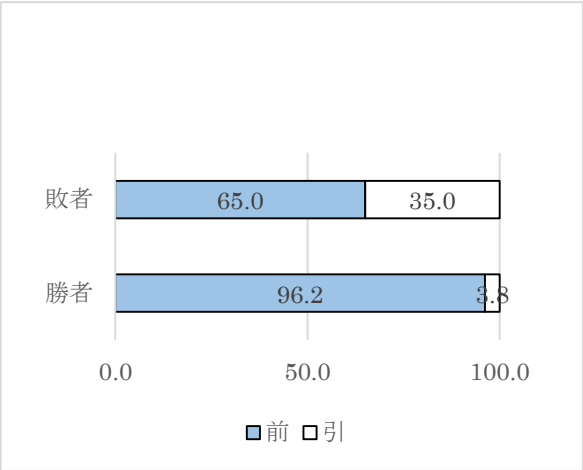

図２６　５４全日本選手権

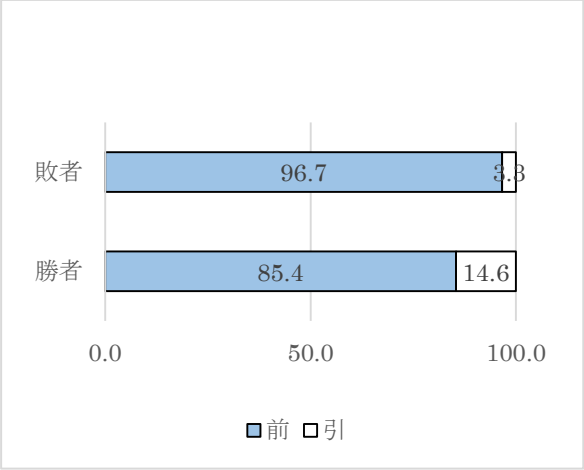

図２７　５５全日本選手権

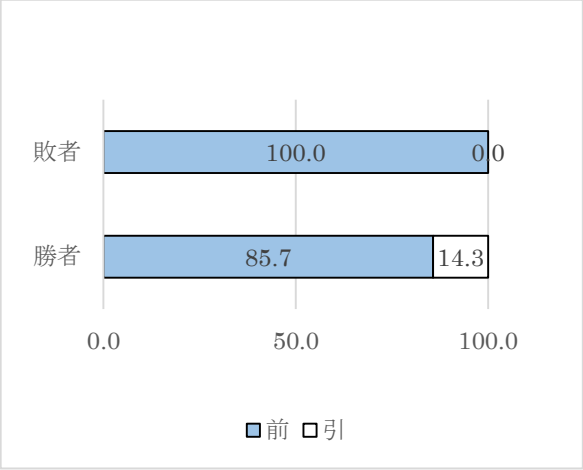

図２８　５６全日本選手権

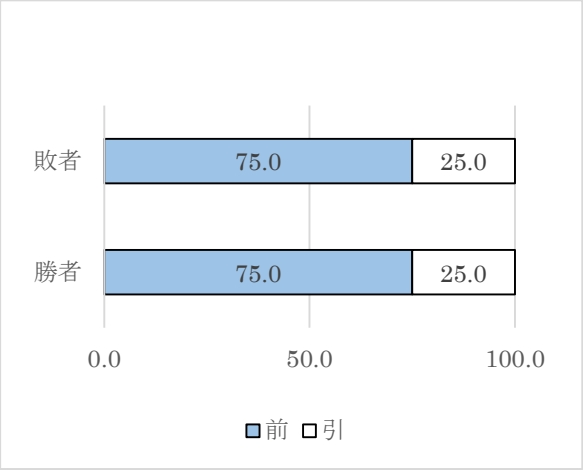

図２９　５７全日本選手権

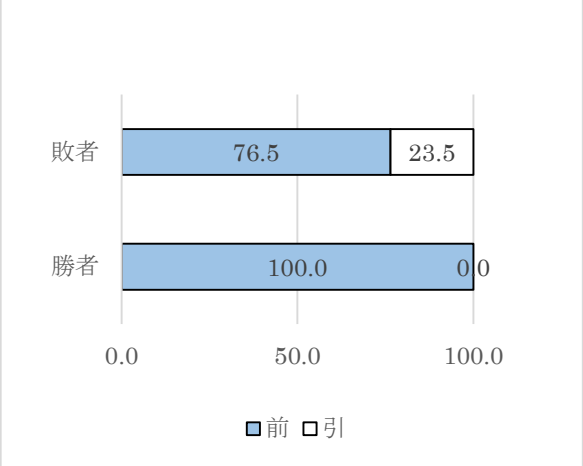

図３０　５９全日本選手権

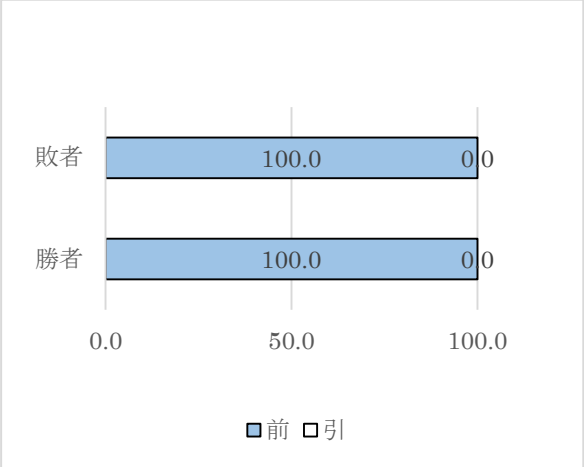

図３１　６０全日本選手権

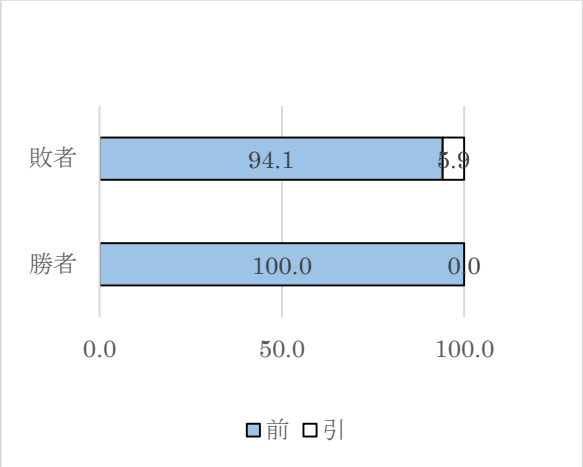

図３２　６１全日本選手権

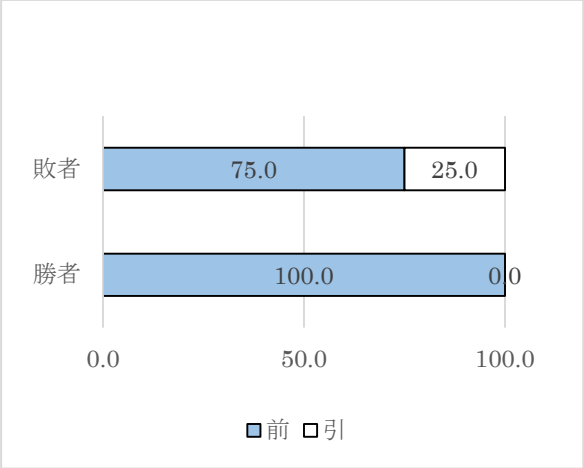

図３３　６２全日本選手権準決勝①

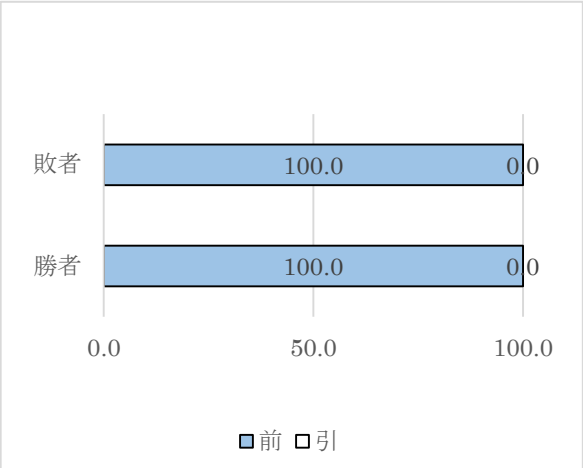

図３４　６２全日本選手権準決勝②

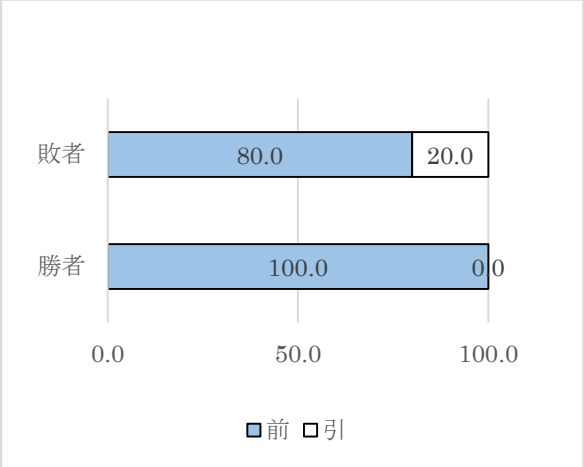

図３５　６２全日本選手権決勝

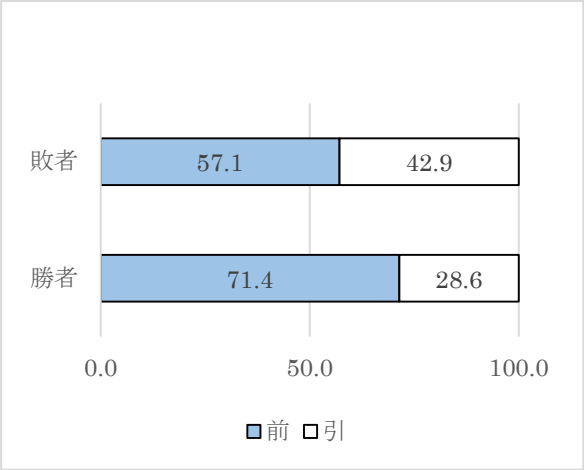

図３６　１６世界選手権準決勝

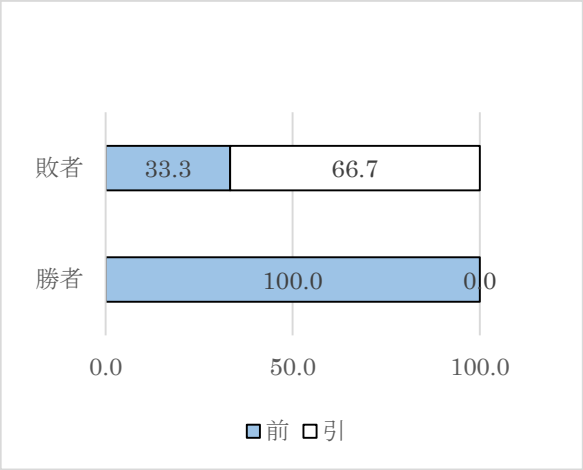

図３７　１６世界選手権決勝

4　考察

私たちは、試合において鍔競合いから技を出す、すなわち引き技を打突することによって試合を優位に進めることができるのではないかと仮定し、引き技の有効性について調べてきた。研究結果から、引きながら打突した数の割合が敗者よりも勝者が上回った試合は、２７年西三河個人９試合中７試合で勝率８割、２７年県個人１２試合中７試合で勝率６割、１６世界選手権・５１～５７、５９～６２全日本選手権１５試合中３試合で勝率２割であった。レベルが高い試合になるにつれて、引きながら打突する割合とその勝率が低くなっていた。これは、私たちが仮定したこととは、若干異なる結果となった。

この結果から、私たちが考えたことは、引きながら打突するということは、高度な技術なのではないか、ということである。２７年西三河個人のような地区予選レベルでは、引き技を打てる人と打てない人、またその引き技を打たれないように対応できる人とできない人の差が大きいのではないか。また、全日本選手権のベスト４以上では、引き技を打てるのが当たり前の選手が、不用意に引き技を打ち、相手にとびこみ技を打たれる状況をつくらないこと、さらに引き技を打って場外に出て反則にならないようにするなど、打突の機会を見極める力が優れていることが考えられる。そのため、高校生よりも引き技の打突の割合が低くなったのではないか、という結論に至った。

5　まとめ

今回の研究を通して、愛知県内の高校生の大会では、鍔競合いから引き技を打突することで、試合が優位に進められる可能性が高いことがわかった。つまり、

全国高校総体、全国選抜大会に出場するためには、引き技を打てるようになることは最低限身につけておかなければならない技術であると考えられる。また、全日本選手権ベスト４以上のレベルでは、引き技を打てることが前提であり、自分が不利な状況にならないように引き技を打つ、さらに引き技を打つ機会を与えないということも重要であると考えられる。

全日本選手権は、剣道界の中では世界最高レベルといって過言ではない。平成２７年度第６２回全日本選手権大会は、第３位に大学２年生の梅ヶ谷選手が入賞された。梅ヶ谷選手は、私たちが高校１年の平成２５年玉竜旗高校剣道大会に出場したときに高校３年生であり、次々と勝ち抜いていく姿は今でも鮮明に脳裏に残っている。全日本選手権の準決勝で惜しくも敗れたが、相手の動きに即座に反応して打突した引き技は、とても素晴らしかった。私たちと年代の近い選手が全日本選手権で活躍されている姿を見ると、より完成度の高い引き技を身につけたいと強く感じた。

本研究の反省は、大学生や実業団の大会まで分析することができなかったこと、そして、大会ごとに分析する試合数が異なってしまったことであった。今回は、ここで研究が終わってしまったが、機会があればより多くの大会を分析し、より正確なデータを取りたいと思った。

今後、後輩たちには相手の隙を狙った引き技とそれに対応する技術を身につけ、さらに上の大会を目指してもらいたい。

本研究の結果が、今後の三好高校剣道部の発展につながると幸いである。

６　参考文献

○剣道試合・審判規則
剣道試合・審判細則
（財団法人　全日本剣道連盟）